

## 海外視察報告：マレーシアの現状と課題

(元青年海外協力隊隊員・お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター研究協力員 坪川紅美)  
(お茶の水女子大学人間文化研究科・子ども発達教育研究センター研究協力員 野口隆子)

### 調査概要

- ・10月6日から10日まで、マレーシアにおける幼児教育の調査を行った。
- ・マレーシアの幼稚園の70%を運営する地方開発省(KEMAS)・笹森シニアボランティア・国際協力機構(JICA)のご協力のもと行った。

### マレーシアにおける幼児教育の現状

- ・マレーシアは中進国であり、途上国ではない。アジアの優等生と呼ばれるマレーシアの経済発展は著しく、現在2020年に先進国入りをビジョンとして掲げている。インフラが整備され、繁栄が目に見える形で進んではいるが、海外の企業からの投資によって進められた国作りが、人件費がより安く、技術レベルの高い中国へと資本が移されている中、このまま発展が持続するかどうかを懸念する声も伺うことができる。
- ・現在、フォーマル教育として幼稚園の拡充に努めているマレーシアだが、経済発展がなされたことによって幼児教育に手をまわす余裕ができたことに加えて、人的資源開発としての幼児教育を振興させようという気概を感じた。しかしそのことが、天然資源以外に目立った産業のないマレーシアの危機感の現れにも思えた。
- ・1957年の独立以降の幼児教育の発展について。独立後、国民教育制度として様々な教育拡充を行ってきたマレーシアだが、幼稚園教育に関してはかやの外に置かれていた(幼稚園教育の整備着手は30年遅れる)。しかし、ブミプトラ政策(マレー系優遇政策)の一環として民族・地域間の教育格差の是正・栄養改善に取り組むなかで、教育省の関与のないノンフォーマル教育として60年代にすでに地方にも幼稚園が開かれていく。全国的普及は80年代で、地方開発省・国家統一局など様々な省庁が幼稚園を精力的に作った。しかしその現実には、教員養成のないまま、高卒資格で教壇にたつという状況だった。
- ・ノンフォーマルとして幼稚園教育の振興に、多くの海外からの幼児教育に対する支援があった。青年海外協力隊の活動も80年に始まった(92年に終了)。
- ・オランダのNGO(Bernald Van Leer)やUNICEFは幼稚園教育の改善を目指し、教育省に働きかけて就学前教育指針の作成に携わった。それまで幼児教育と関係を持たなかった教育省が幼稚園教育の指針を作成したことは、後のフォーマル教育への移行の重要なターニングポイントとなったと考えられる。
- ・1996年に国民学校システムの中に入り、フォーマル教育としての幼稚園教育の幕開けとなった。それ以前の1992年に、教育省は小学校併設の就学前クラスをすでに始めているが、1996年に正式にフォーマル教育として法律の上で認められたことになる。そして今

年、マレーシア初の教育指導要領が施行された。

- ・毎年、就学前クラスを1500ずつ増やししながら、2007年度までに全6歳児を教育省の国民学校就学前クラスへと移行させ、4-5歳児はノンフォーマル教育時代から幼稚園教育を手掛けてきた地方開発省や国家統一局が引き続き教育にあたることになっている。

幼稚園の実際の様子（視察ビデオ放映）

- ・地方開発省が行っている5歳児クラス。子どもの表情が固く、先生の顔に笑顔がない事がみてとれる。先生の言葉がけは指図型で、次にこれこれをしなさいと指示し、それが子どもができるかどうかを見守るというより、監視しているという感じだった。3つのグループに分かれ、それぞれが違う活動を行うのだが、ワークブックはおとなしく作業させるためにはいい教材だった。
- ・保育室の環境は、他の途上国と比べて物は豊かにある。机も椅子もきれい。座って何かをする保育が中心。室内では（かなり狭かったが）子どもが遊ぶ空間は確保出来ない。たとえおままごとコーナーがあっても本当に活かせているか（これは子どもによって有効に使われているかを問うものだが）使っている様子が伺えない幼稚園が多かった。
- ・ビデオでもワークブックをしていたが、この保育の姿が平均的なマレーシアの保育。6ヶ月ある養成の段階では、ワークブックを使用した保育の展開を指導していない。しかし、読み書き算数に重きを置いてきたため、目で結果が見えるワークブックが安易に入ってくる。また、教師も保育準備をする手間が省けるのだろう。
- ・国民学校の併設の就学前クラスでも、ワークブックを抜粋しながら子どもに与えている。丸まる与えず、教師が必要と思われるところを選んでいるということは評価してもいいのかもしれない。
- ・どのクラスにも塗り絵が飾られていた。絵画製作の一環というよりも、他の学科での活動の一コマ（たとえば、家族について話し合うという課題の時、塗り絵が配られているようだ）。絵に教条的要素がある。
- ・園庭のオブジェ。とても綺麗に整えられている。これはPTA活動で、保護者が分担して植物などの手入れをしている。親の協力がしっかり得られている幼稚園。
- ・園舎の外観。綺麗だが、子どもが参与して栽培活動をしている様子がないことも同時にわかる。
- ・園庭の固定遊具。鉄製遊具の質の問題もあるが、滑り台が安全性を考えられず配置されている。幼稚園に砂場はあっても使われている様子を感じられるところはなかった。砂すらなかった。幼稚園で固定遊具は必要という認識はあるものの、子どもが実際に使うという事に視点があてられていないようだった。幼稚園教育の意味することが理解されていない姿が現れている。

### 教育要領

- ・今年施行された。6領域にわけられる。日本の6領域の時代のものと分け方が違うが、子どもが行う活動の種類によって分けられている点では似たところがある。
- ・保育は、時間割りによって進められる。日案で、数字がふられている所は、活動の成果として教育要領に記されている。この日案の問題点は、保育の質を読み取ることができないこと。教育要領に書いていることを日々の保育の中にもうまくばらまくことが逆に良い保育とみなされる可能性がある。

### 今後の課題

- ・識字は途上国において大きな問題。読み書き計算の教師中心型保育という現実を受けとめながら、どのような支援が大切であるかを考えてみた。現在、世界の教育動向に子ども中心の教育を途上国に導入しようと活発な動きがなされている。マレーシアの教育要領の中にも統合的に保育を考える必要性が要領の後ろに記載され、子ども中心の考え方のきざしが見られる。指導者層からは、子どもは遊びを通して学ぶのですという発言もでてきている。そういった事から、子ども中心の保育を導入しやすい状況が整っているのがマレーシアだと考えられる。現実の保育は違うが、子どもの視点にたつ保育を目指した技術協力が求められている。
- ・支援の在り方を考える3つのポイント。第1に、日本の幼児教育(システム・制度・モデル)の変遷から得られる示唆。日本も初めから子ども中心の教育だったわけではない。実践を通して子ども観が深められながら今の保育観ができたことから、日本の幼児教育の変遷は途上国にとっても示唆に富むと思う。また、マレーシア側からも変遷を知りたいという要望もある。第2に、日本の保育技術。子どもにたつ保育の視点を養うためには、実際の保育場面をみながら意見交換をすることが大きい。この視点はすぐに子ども中心の保育へとつながるものではないが、保育の質の向上には直結していく。マレーシアの12年間の活動の中で、生活面・衛生面は10年のスパンの中で改善されていきましたが、この視点を育てることが歴代の隊員達の大きな課題だった。しかし一旦その視点が養われると、協力隊の手が離れて10年たっても、現地教員の中に生きていた。第3に、地方開発省や国家統一局が、今後年令を下げた保育にあたることを考えると読み書き以外の保育活動の拡充のできる支援が急務と思われる。
- ・80年代には、養成のないまま保育をするという問題があったが、現在においては、国民学校の就学前クラスで幼児教育の養成過程を終えた教員の不足がある。他の省庁では、6ヶ月・2ヶ月と期間は短いものの事前に養成がなされている。
- ・問題は、地方開発省においては、養成する 트레이ナ - とされる人々が短大卒という学歴だけで 트레이ナ - の資格を得、6ヶ月の 트레이ナ - の養成だけで、指導に携わることにある。また今回教員養成校や大学での養成については調査ができなかったが、2007年までに毎年1500クラスずつ就学前クラスを増やすことを計画している教育省の養成も

養成者不足が容易に察せられる。

- ・ マレーシアは他の途上国の状況から見ると、大変恵まれている。しかし、他の途上国と同じような保育状況から出発して今があるということを考える時、マレーシアが抱える問題は途上国にも通じる問題でもあることから、マレーシアへの支援は、他の国の支援の在り方の模索にもつながるのではないかと思われる。